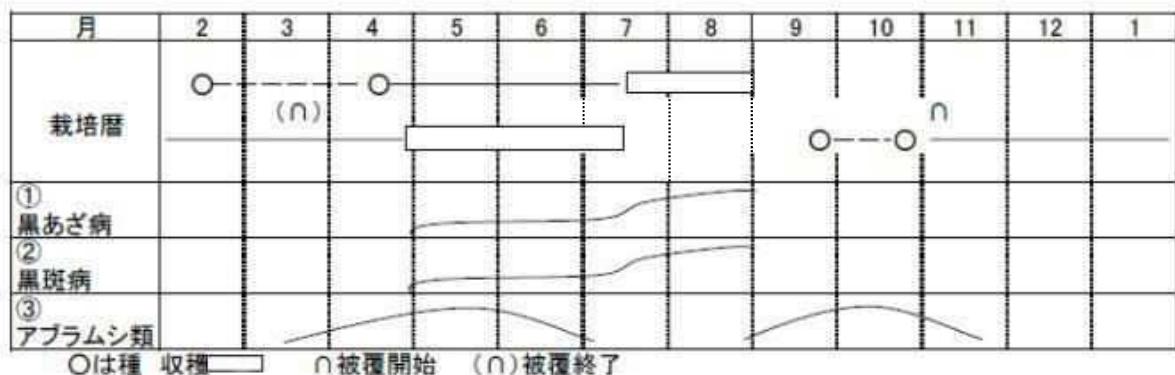


25) ゴボウ

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期



2 主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
萎凋病 (<i>Fusarium</i>)	<p>①発病株を除去する。 ②ゴボウを連作せず、イネ科など他作物を2作以上栽培する。 ③土壤pHを6.0～6.5に矯正する。</p> <p>【参考事項】 厚膜胞子の形で土壤中に残って伝染源となる。また、ごく一部は分生子や菌糸が種子に付着して種子伝染するものと考えられる。 ゴボウが発芽、発根を始めると、病原菌も胞子から発芽して、菌糸で根から侵入する。 侵入した菌は次第に上方へ移行し、導管が褐変して萎凋枯死する。 沖積土壤の酸性土壤で発生が多く、洪積土壤では比較的少ない。</p>	<p>①作付け前に土壤消毒する。 (例) クロルピクリン・D-Dくん蒸剤(ダブルストッパー) クロルピクリンくん蒸剤(クロピクフロー) ダゾメット粉粒剤(ガスターD微粒剤、バスアミド微粒剤) メチルイソチオシアネート・D-D油剤(ディ・トラベックス油剤)</p>
黒あざ病 (<i>Rhizoctonia</i>)	<p>①連作を避ける。ゴボウを3作以上休作する。前作としてはイネ科作物が良く、根菜類の作付けは避ける。 ②排水不良地への作付けは避ける。 ③土壤pHは5.5～6.0に矯正する。 ④秋播き栽培の場合は適期に収穫し、遅掘りは避ける。 ⑤春播き栽培の場合は、早播きを避ける。 ⑥間引き作業のとき、葉柄や葉に異常のある株を抜き取る。 ⑦被害株を処分する。</p> <p>【参考事項】 本病原菌は多犯性で、多くの野菜・花き類に寄生する。 土壤中で被害植物あるいはその他の植物残さに菌核、菌糸塊、厚膜化細胞の形で付着又は腐生して越冬し、土壤伝染する。 生育初期には苗立枯病を、また、生育中～後期には葉柄腐れを起こす。根部では黒褐色の病斑を形成する。 酸性土壤および排水不良地で多発しやすい。C/N比の低い未分解有機物を多量施用すると、発病を助長する。</p>	<p>①作付け前に土壤消毒を行う。 (例) クロルピクリン・D-Dくん蒸剤(ダブルストッパー) クロルピクリンくん蒸剤(クロールピクリン、ドジョウピクリンなど) ダゾメット粉粒剤(ガスターD微粒剤、バスアミド微粒剤) ②は種前に適用のある農薬を作条または全面土壤混和する。 (例) アゾキシストロビン・メタラキシルM粒剤(ユニフォーム粒剤) トルクロホスメチル粉剤(リゾレックス粉剤) ③は種時に適用のある農薬を播溝土壤混和する。 (例) シメコナゾール粒剤(モンガリット粒剤)</p>
黒斑病 (<i>Ascochyta</i>)	<p>①連作を避け、マメ科、ナス科及びウリ科作物以外との輪作を行う。 ②は場の風通しと日当たりをよくする。 ③発病葉は丁寧にかき集めて処分する。</p> <p>【参考事項】 マメ科作物、ナス科作物、ウリ科作物などを侵す。 柄子殻の形で病葉について越冬し、翌年これより柄胞子を出して伝染する。 6月頃から下葉から発生はじめ、梅雨期の長雨は発病を助長する。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。 (例) キャプタン水和剤(オーソサイド水和剤80)</p>

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
アブラムシ 類	<p>①軟弱徒長になると発生しやすいので、窒素過多にならないよう、施肥管理に注意する。</p> <p>②掘残しのゴボウの新芽は早期に刈り取る。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。</p> <p>5月中旬～下旬には場をよく見まわり、アブラムシの発生を認めたら早めに防除を行う。</p> <p>主葉に無翅虫の発生を認めたら、速やかに農薬を散布する。</p> <p>同系統の農薬の連用は避ける。</p> <p>種子取り用ゴボウ、秋播きゴボウの防除を徹底する。</p> <p>(例)</p> <p>イミダクロプリド水和剤（アドマイヤーフロアブル） フロニカミド水和剤（ウララDF） ペルメトリシン乳剤（アディオン乳剤） MEP乳剤（スミチオン乳剤）</p>
<p>【参考事項】</p> <p>春期に高温が続き乾燥した年には、有翅虫の飛来が多いので注意する。</p> <p>ゴボウヒゲナガアブラムシ：</p> <p>キク科植物（主にゴボウ）に寄生し、ゴボウでは6～7月に増殖する。夏期にはほとんど生息しないが、初秋に再び有翅虫が飛来し、葉裏で無翅虫が増殖する。晩秋に両性世代の個体が出現して卵越冬、また胎生雌虫でも越冬する。ゴボウモザイクウイルス（BuMV）を媒介する。</p> <p>モモアカアブラムシ：</p> <p>バラ科植物上で卵越冬する。暖地では、アブラナ科の野菜や雑草の葉裏などで無翅胎生雌虫で越冬する。有翅虫は5月に出現し、ゴボウには本葉2～3葉期に飛来して無翅虫が増殖する。8月の高温期には減少するが、9月に再び増殖し加害する。ゴボウの被害は5～6月に最も多い。</p> <p>ゴボウクギケアブラムシ：</p> <p>ゴボウ、アザミが中間寄生である。ゴボウでは初夏と秋期に寄生をみるが、生息数は少なく実害はない。</p>		
センチュウ 類（ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウ）	<p>①対抗植物と輪作するか前作に対抗植物を栽培する。</p> <p>ネコブセンチュウにはギニアグラス、クロタラリア・スペクタビリス、マリーゴールドなど有効</p> <p>ネグサレセンチュウにはハブソウ、マリーゴールド、えん麦など有効</p> <p>②太陽熱消毒を行う（土壤病害虫の防除法の項参照）。</p> <p>③有機物を施用する。</p>	<p>①作付け前に土壤くん蒸する。</p> <p>(例)</p> <p>クロルピクリンくん蒸剤（クロールピクリンなど） D-D剤（D-D、テロン）</p> <p>②作付け前に粒剤を施用する。</p> <p>(例)</p> <p>オキサミル粒剤（バイデートL粒剤、バイデートMK） カズサホスマイクロカプセル剤（ラグビーMC粒剤）（ネグサレセンチュウのみ） ホスチアゼート粒剤（ネマトリンエース粒剤）</p>
<p>【参考事項】</p> <p>ゴボウではネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウによる被害が大きい。ゴボウのキタネグサレセンチュウ寄生による被害は、シミ状の褐点や亀裂、拡大した黒変部、くびれ、寸詰まりの症状が現れ、表皮が黒ずんだ状態は「焼け症」とも呼ばれる。</p> <p>対抗植物を栽培する場合は根量を十分確保することが効果を高めるポイントであるので、十分な栽培期間を確保する。また、対抗植物は品種・系統により効果に大きな差があるので、効果の高い品種を選定する。</p> <p>有機物を施用すると、土壤中の生物相が豊かになり、センチュウ類の天敵も増加するため、相対的に有害土壤線虫の密度が減少する。</p>		